

地域住民への情報発信のあり方に関する基礎研究

～パイロットフォレストに対する意識と利用ニーズ～

根釧西部森林管理署 長谷川 学
石橋 美幸

1 背景と目的

これまでパイロットフォレスト（以下 PF）では一般市民に対し積極的な情報発信を行ってきました。望楼、研修管理棟・機械標本展示庫、遊歩道、展望台、案内板などが利用施設として整備され、それらを活用し JICA 研修や新人教職員研修などの各種研修や視察、地域の教育施設主催の森林教室などを受け入れており、近年では署主催で一般向けのイベントも開催しています。今後も市民の森林に対する関心および木材資源の持続的供給への期待も高まる中で、森林に対する多様な期待に応えていくためには、自然環境保全と調和させた持続可能な北方林業の姿を示すとともに、より広く地域住民へ情報発信をしながら周辺地域との良好な関係を築いていくことが重要と考えます。

そこで本研究では、PF に関する情報発信について現在の課題を整理し今後のあり方を考える上で参考とすべく、一般市民に向け PF に対する意識と利用ニーズに関するアンケート調査を行いました。しかしこれまでの同様のアンケート調査は多くが、比較的意識や積極性の高いと思われるイベント参加者に対してのみ行われ、調査結果が地域の一般住民の平均的な認識と乖離している可能性があったことから、本研究では国有林主催イベントの参加者および PF が所在する地域の住民双方に対して調査を行い、両者の比較考察を行いました。

2 調査研究手法とアンケート内容

イベント参加者には各イベント時に現地でアンケート票を配布し、その場で 83 通（回収率 100%）の回答を得ました。

一方地域住民向けのアンケート調査は PF がまたがる標茶町・厚岸町全域（1838.64km²）の計 700 世帯（1 世帯 2 名、1400 人以下を想定）を対象に行いました。方法としてはまず世帯数を地区別に比例配分し、地区毎の無作為抽出を行ったのち調査員 2 名により直接投函の形で配布を行い、その後郵送により 152 世帯 218 通（世帯回収率 22%）の回答を得ました。

アンケートの質問内容は、意識と利用に関する総合的な把握を目的とした以下 16 項目です。

＜第 1 部 回答者の属性＞1. 年齢 2. 性別 3. 住所 4. 職業（職種）5. 森林保全活動に対する関心・積極性 6. PF の知名度

＜第 2 部 PF の林業に対する意識＞7. 今後のカラマツ林施業推進に対する評価 8. PF の森づくりの方針について（今後植えるべき樹種） 9. PF の林業が与える影響に関する機能毎の評価

＜第 3 部 PF の利用に関する調査＞

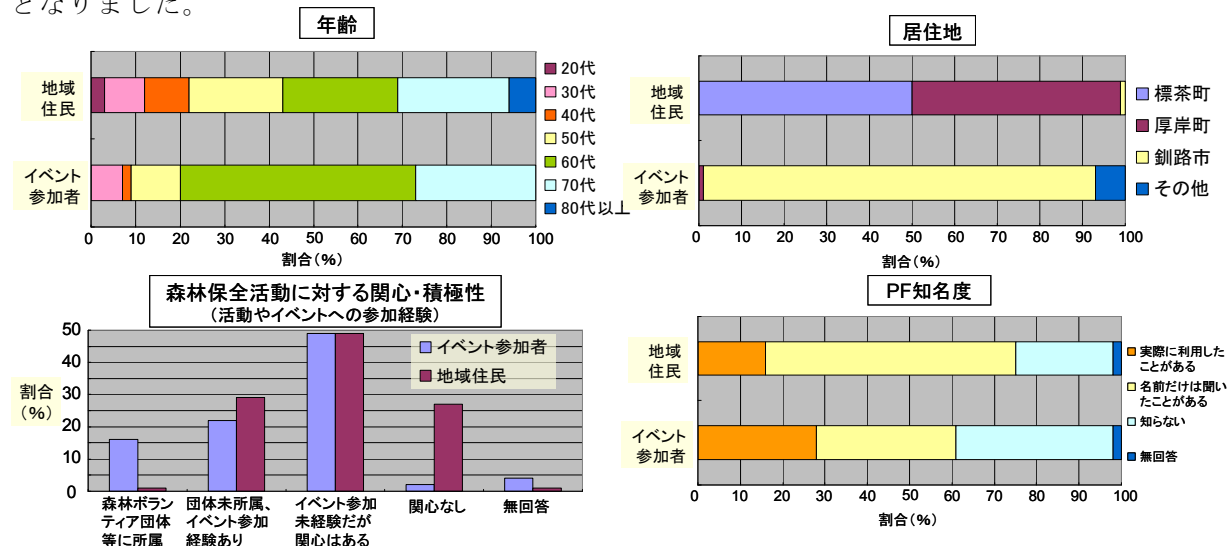
10. イベント参加経験の有無 11. 情報を得た手段※ 12. 体験内容※ 13. イベント参加で得た知識※ 14. PF 利用の希望 15. 利用希望の季節と目的※ 16. 希望、意見（自由回答）

※…イベント参加経験ありと答えた人のみ対象

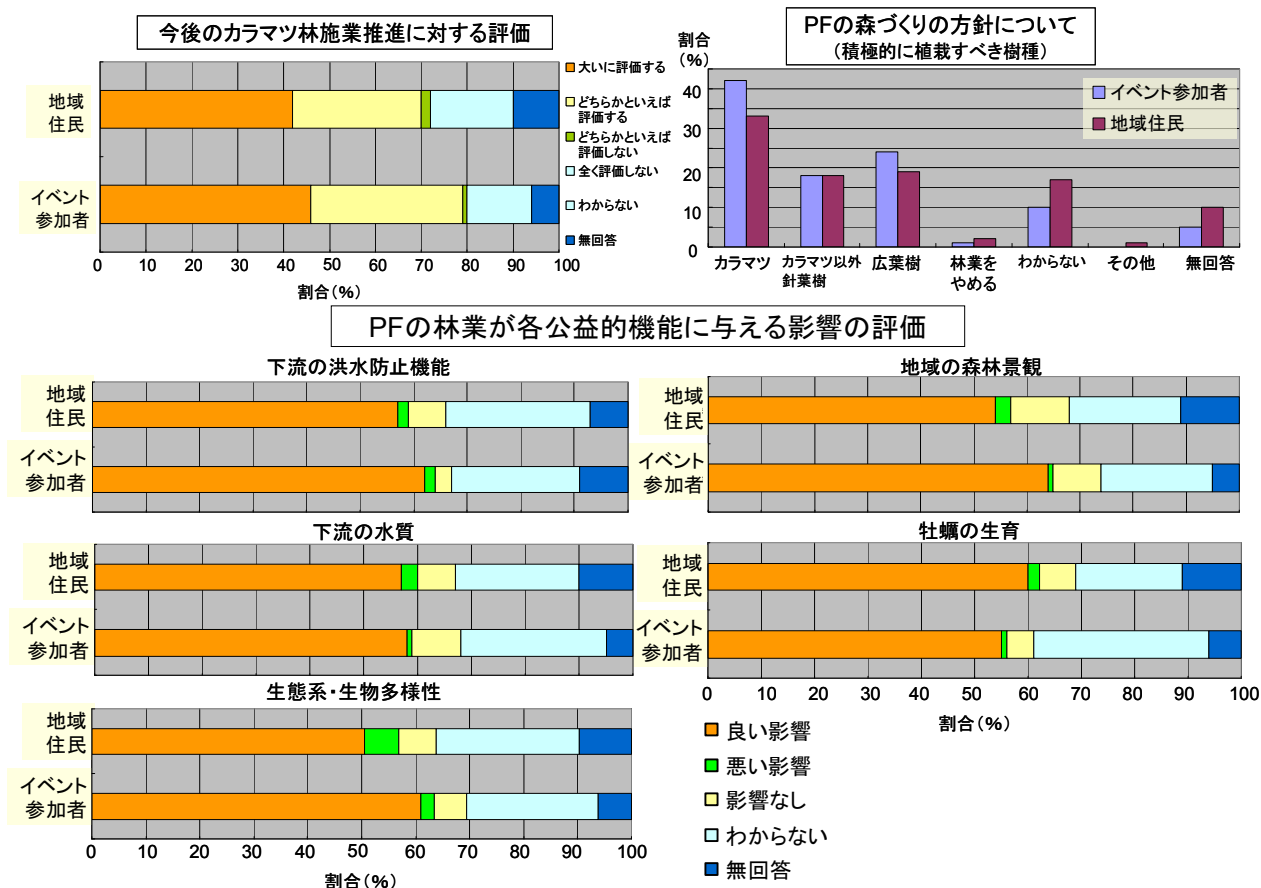
*…PF 利用を希望すると答えた人のみ対象

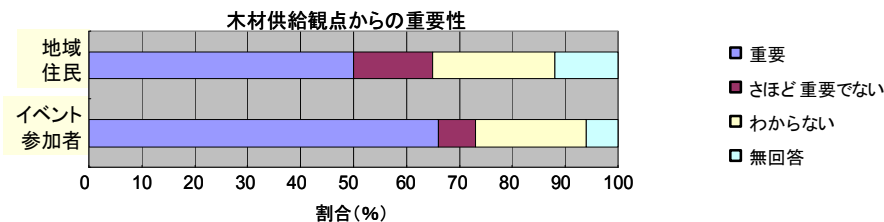
3 結果

＜第1部＞イベント参加者は年齢では60代以上が8割（無職と主婦を合わせた割合とほぼ同じ）、居住地では9割が鉾路市内在住との結果でした。また森林ボランティア団体等に所属し積極的に活動している人がイベント参加者で比較的多い一方、地域住民は森林保全活動に関心のない層が目立つのに対し、PFを知っている人の割合は地域住民が75%でより知名度が高い結果となりました。

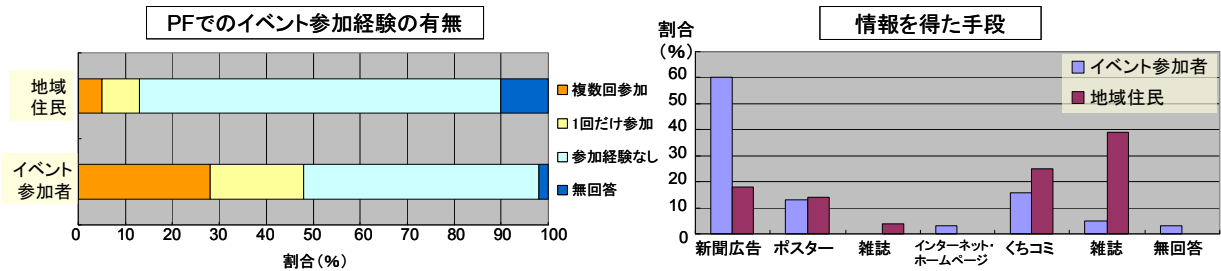


＜第2部＞各設問とも両方で回答傾向に顕著な差はなく、カラマツ林施業の推進に関しては評価する回答が7割以上、今後積極的に植栽すべき樹種としては「カラマツ」が3～4割で「カラマツ以外の針葉樹」「広葉樹」が各2割程度となりました。PF林業の影響に関しては各項目（洪水防止、水質、生態系、森林景観、下流の牡蠣の生育、木材供給の重要性）とも、50～65%程度が良い評価、20～30%程度が「わからない」との回答を得ました。

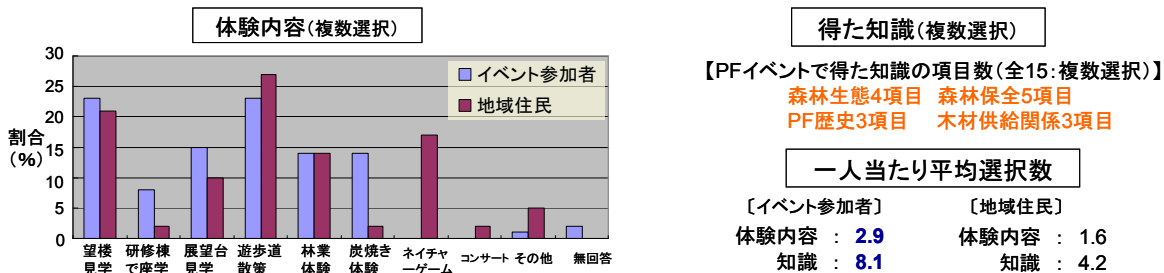




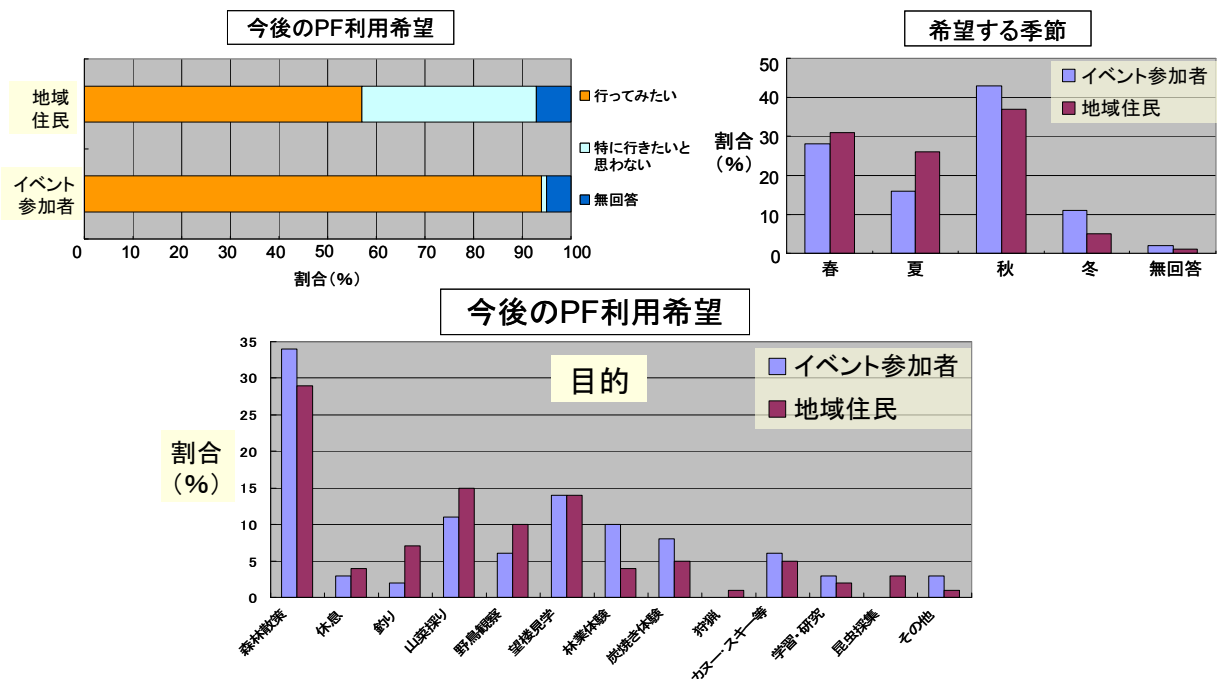
<第3部> イベント参加者では約5割（複数回参加が3割）がPFでのイベント参加経験があり、6割が新聞による情報入手である一方、地域住民は参加経験が約1割にとどまりました。一方地域住民はくちコミもしくはその他が多くを占める結果となりましたが、そのほとんどが町内会行事などの地元の集まりでした。



体験内容は両者とも遊歩道散策、望楼見学が特に多く、体験内容の選択数（9項目中）および得た知識（15項目中）のいずれも、複数選択の平均選択数はイベント参加者が地域住民の2倍となり情報発信効果が認められます。



また今後のPF利用希望はイベント参加者が95%、地域住民が約6割でニーズはかなり高いといえます。目的は森林散策が圧倒的に多く、その次に双方とも高いのは望楼見学でした。また希望する季節は春と秋が特に多い結果となりました。



自由回答では、イベント参加者からは実際の体験や学んだことに基づいた感想や森づくりに対する理解を示すコメントが多い一方、地域住民からはより積極的なPRを求める声や、勝手に入っていいかわからないという声、漠然とした森のイメージに基づいて回答された意見が多くありました。

自由回答(一例)

イベント参加者

- ・ PF と地域産業が互いに高めていけることを期待しています。森林を管理することで生態系を維持していることを学びました。...自然を守りつつ観光資源として活用できると根釧地区の住民自体が、自分たちの住む地域の大切さを認識できると思います。(50代女性)
- ・ 本日はありがとうございました。初体験です。自然の素晴らしい風景や営みの大切さをもっと若い時代へ伝え大きく広がって人々が豊かな心とともに自然をはぐくんで行って欲しいと思います。(70代女性)

地域住民

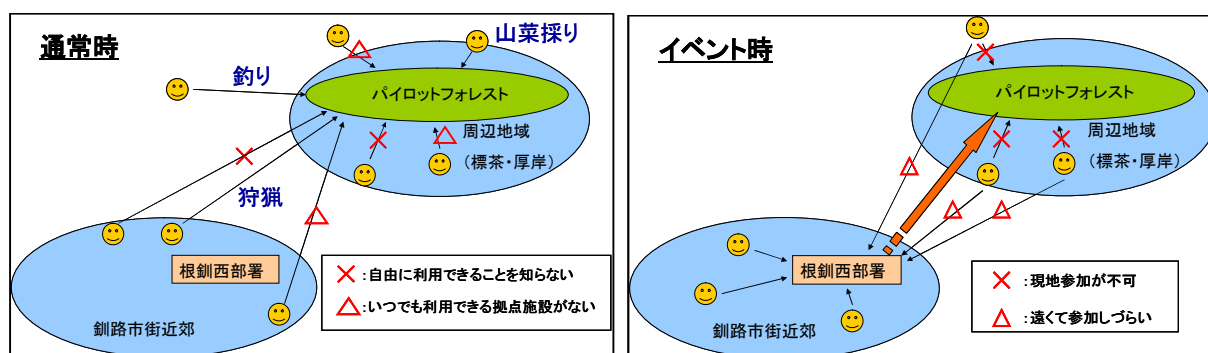
- ・ カラマツの資源としての価値が現在あるのか？もし無いとすれば広葉樹を増やし、野鳥などの住める生態系に戻す方が良いのではないかと思います。(60代男性)
- ・ イベントを開催していることをこのアンケートで知りました。そうしたイベントに興味があるので、もっとPRしてもらえたらいいと思います。環境保全をしながら林業を行って欲しいです。(20代女性)
- ・ パイロットのすぐ近くに住んでいるので友人、知人が旅行などで訪ねて来たとき望楼見学等、気軽に連れて行きたいと思うが、はたして行っているものかどうかかわからない... (40代女性)

4 考察

(1) 地域住民に情報が伝わらず、利用されない現状

国有林としてこれまでも情報発信しているにも関わらず、PFの知名度が高いはずの地域住民にはほとんど情報が伝わらず、PFが利用されていない現状が本研究で明らかとなりました。

通常時においては、山菜採り・釣り・狩猟などの目的の入林者は地域内外から来るものの、それ以外の人々は地域住民でもPFが自由に利用できることを知らないか、PF内にいつでも自由に利用できる拠点施設や展示施設がないために、きわめて個人としての利用がされにくい状態となっています。一方イベントの際にも、釧路の根釧西部署に早朝に集合して行く形となり現地集合が想定されていないことから、結局地域住民には参加の機会が得られない状況となっているという、イベント開催自体の構造的な問題が存在することがわかりました。このような問題をクリアするためには、イベント開催時における現地参加を認めること等が重要と考えます。



(2) パイロットフォレストの利用ニーズ

イベント参加者はもちろん、地域住民についてもPFの利用ニーズはかなり高いことが調査で明らかとなりました。なおPFの利用を希望しない割合は地域住民の約35%ですが、そのうち4割はアンケートの各設問の選択回答がほとんど「わからない」だったことから、国有林のPR不足による無関心が影響していると思われます。

また利用目的に関して森林散策や望楼見学など、自然環境に対し負荷の比較的小さい利用の

要望が多かったことから、遊歩道や案内板等のさらなる整備、現在イベント時以外は施錠している望楼の開放、常時利用できる拠点施設の整備等により、平常時においても一般市民の利用の機会を高めることで、より一層の情報発信を図っていくことが必要と考えます。

(3) 国有林イベントの効果

第2部における各設問の両者の回答に顕著な差は見られないことから、残念ながらイベント参加の経験だけでは参加者の森林・林業に対する価値観を直ちに変えるには至らなかったといえます。しかしながら、そもそも森林ふれあいイベントなどを開催する本来の意義は、人々の森に対する漠然としたイメージを実体験に結びつけることにあると考えられ、実際、自由回答の結果にそういった側面が表れています。また国有林主催のイベントの情報発信効果は比較的高かったことから、今後は一層それを活用し、一般の人に理解を深めて欲しい内容とは何かを十分に整理し、実際の体験と併せてわかりやすく伝えていくべきと考えます。

5 今後の情報発信のあり方について

本研究をふまえ、今後の情報発信のあり方について以下のことを提案します。

【ハード面】

- ①既存の利用施設の周辺を利用促進地域に指定 ②望楼の常時（または特定期間の）開放
- ③遊歩道・案内板のさらなる整備・延長 ④遊歩道上の休憩施設の設置
- ⑤地域の人がいつでも自由に利用できる展示施設や広場空間など拠点施設の設置

特に、常時展示施設の設置は情報発信内容の整理につながり、イベント等でも担当者が変わることによる解説内容のばらつきの抑制と水準維持が期待できます。

【ソフト面】

- ①地域住民向けに現地集合にした形で、森の中ならではの心地よい空間を活かしたイベント開催の充実（森の中のコンサート、望楼見学ツアーなど）
- ②地域の様々な主体（※表参照）との連携プログラム創設、積極的なフィールド提供
- ③テーマ別森林講座の開講による森林管理ボランティア養成
- ④森林管理ボランティアによる利用施設の協働管理

こうした積極的な取組みによって情報発信をしていくことで、森林施業や森林管理に対する深い理解の上で地域に親しまれる、真の意味で国民に開かれた国有林へと変わっていくことを期待します。

なお本研究は周辺地域住民を主眼に置いた情報発信のあり方を論じてきましたが、その特徴として、情報入手のツールにインターネットがほとんど活用されないことが挙げられます。その理由としてイベントの情報を提供するウェブサイトが整備されていないこと、調査対象に高齢者が多いことなど様々挙げられますが、他方今後戦略的な情報発信を行うにあたって、特に若い層に向けては、インターネットはもちろん、ツイッターやフェイスブックといったSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などの活用も視野に入れていくことが不可欠になると考えられます。

※ 提案する地域の多主体との連携例

大学	: ゼミ・授業・研究等のフィールド提供
学芸施設	: 博物館等と連携した一般向け森林・林業講座
ネイチャーガイド	: PF内で自由に活動できる環境づくり
教育委員会	: 「森の幼稚園」など子供が自由に遊べる環境づくり